

第 35 回(2010. 3. 30 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「申は猿」

申は、古代中国では「呻(しん)」とあって、植物の実が熟れて固まっていく状態をさす言葉だったが、これを動物の猿に当てはめたものだとされている。

日本には、日本にしか生息しないニホンザルと屋久島に住むヤクザルがいるが、青森県の下北半島に生息している野生のニホンザルは世界でも生息地の北限の猿である。国の天然記念物に指定されているが、農産物の被害が大きいため殺すこともならず、一部の猿が捕獲されて上野動物園の猿山に放ったところ、いちばん歳をとった猿が 4メートルの壁を軽々と飛び越えて逃げ出した。つい最近の話である。さすがは野生猿の面目躍如といったところか。たいがい十数頭から百数十頭で群を作り、集団で行動するが、ボス猿が群を仕切っている。先頃、ペットから野生化したアライグマと餌の取り合いで、ボス猿がアライグマに負けて、その集団はボス不在の状態が続いているという話があった。また、観光地の近辺に棲息する猿は、お土産店の商品を失敬したり、観光客の食べ物を奪ったりして、時には人間を威嚇したりする。これらの現象は人間の勝手から生態系に異変が起きている証拠である。

猿は、生物学上は霊長類で、ゴリラ、オランウータン、チンパンジーなどの大型類人猿と、ニホンザルやカニクイザル、ヒヒなどの鼻が狭い猿、リスザルやタマリンなどの鼻の広い猿との 3 種類に分類されるが、もう 1 種類あって、それが人類である。人類最古の人間を猿人と呼ぶが、猿人と猿の違いを直立歩行できるかどうかで決めている。また、猿と人間は体内でビタミン C を合成できないという共通点があるが、1992 年にエチオピア大地溝帯から発見されたラムダス猿人の骨化石は、440 万年前のものといわれており、そこで、猿と人間のルーツは同じで、およそ 1 千万年前ごろに、猿と人間に分かれてそれぞれ進化してきたのだといわれている。しかし、敬虔なユダヤ教徒やキリスト教徒は、『旧約聖書』にあるアダムとエバ(英語名ではイヴ)が祖先で、神が人間を造ったと信じているから、人間が猿から進化したとは認めたくないで教育界は悩んでいるという。日本では年間数千頭もの猿を輸入している。ペットとして飼っている人が結構いるからだが、こういう人はご先祖さまと暮らしているわけだから、大切におもてなしをして、決して虐めてはいけない。

閻魔に告げ口する虫

猿は人間と同じ霊長類で知能も高いことから、昔から人間との関わりが強かったと思われるし、また日本人は猿に対する畏敬の念を持っていた節がある。その一つに、日本神話の国譲りの話に出てくる天孫降臨の際に、地上で道案内をつとめたのが、地上界の神の一人であるサルタヒコノミコト(猿田彦命)で、その後伊勢神宮に奉仕したといわれている神さまである。余談だが、後に天孫(アマテラスオオミカミの孫であるニギノミコト)に随っていたアマノウズメノミコト(天宇受売命)と結婚した。そこで、交通安全、国土の守護、五穀豊穰などから夫婦和合、安産祈願まで幅広く信仰の対象とされている。サルタヒコは赤ら顔で鼻が高い神で、祭礼の際にも神輿の先頭を切ることが多い。ちなみにアマノウズメは、アマテラスオオミカミが弟のスサノオが暴れたため岩穴に隠れてしまった「天の岩戸事件」の際に、岩戸の前でストリップまがいの踊りを披露して、ほかの神様たちの喝采を浴び大騒ぎになったため、アマテラスがおもわず隠れていた岩穴から出てきたという神話で有名な神様である。おかめのような愛嬌ある顔で豊満な肉体の持ち主だったという。こういった神話から、「ストリップは神聖な踊りだ！」などと妙な理屈をいい張るストリップファンもいるようだ。

猿は十二支では「申」だが、道路端に「道祖神」や「庚申講」と書かれた石碑、あるいは青面金剛が邪鬼を踏みつけた絵が刻まれている庚申講の石碑などが建っているが、それらに見ザル、いわ

ザル、聞かザルの三猿を加えた石碑がある。これらは道祖神や庚申講などと、サルタヒコの神話からの「猿」を混同しているものだが、道祖神とは村の境界線上に建てられた結界であり、そこから天孫の道案内をしたサルタヒコの神話を結び付けたものであろう。また青面金剛は庚申講の本尊だが、「庚申」は庚申信仰といって中国の道教の影響である。人体には、三尸(さんし)という虫がいて、庚申(かのえさる)の日に熟睡していれば天に昇って閻魔さまに告げ口をするから、寝ないで夜明かししよう、という信仰で、この集まりを庚申講といい、庚申の日は60日に一度だから年に6回行う。この日は、身を慎んで籠もらなくてはならないのだが、この時とばかり男女が淫らな行為に及んだり、博打をしたりして過ごした罰当たりな人もいたようだ。昔の日本人社会は、様々な規則や人間関係のしがらみとか古い道德観念とかで、大変不自由に出来ていたが、この夜ばかりは夫婦は別々だし堂々と夜更かし出来て、しかも信仰という大義名分があるから、この日ばかりは老若男女すべての人が羽目を外そうと思えば出来たわけだ。現代では、堂々と淫らなことをしている人が多いようだし、そのための施設や情報まで提供する商売が増えている。道德観念などはすっかり死語になった。もしかすると、近年は急速に保健衛生環境や医療技術が発達してきたので、三尸という虫が駆除されて、死滅してしまったのかもしれない。

足りないのはどっちだ

猿を「えてこう」と呼ぶ人がいる。この語源は、「さる」は「去る」に通じるから忌み嫌い、反対の意味から「得る」を用いて「得手」、敬う「公」、すなわち「忠犬八公」などの公をつけたものといわれている。この「得る」を「得手」としたのは、得手とは最も得意とするところの意味だから、「他人にマサル」というシャレからきているという説がある。また、猿は人間よりも毛が3本足りないとか、猿まね、猿知恵などあまり評価がよろしくない。それは、裏返せば猿が非常によく人間に似ていて、賢い動物だということだろう。また、猿は本来非常に親しみやすい動物でもある。しかし、ある山深い秘湯に旅行した際の話だが、そこでは農家が猿の被害にあって大変だという話を聞いた。山間にある猫の額ほどの畑の作物を、根こそぎ取ってってしまうという。猿は知恵がある動物だから、いくら防禦法を考えてもすぐに破られてしまうので、村で捕獲する方法を話し合っていたら、動物愛護を叫ぶ人たちがやって来て大騒ぎになったという。自分が被害にあったこともなく、その現場を見たこともなく、だからといって村民の生活を保障してくれるでもなく、かといって公的機関に掛け合ってくれるでもなく、1年の収入のめどが立たずに、途方に暮れている人たちに向かって、ただ罵声を発するだけだったそうだ。山林開発などの影響で、山に住む動物たちの食糧不足につながったのが原因なのかもしれないが、都会に住む人と山村に住む人との生活形態が同一ではないから、一方的に山林開発が悪いというものではない。伐採された木や、木の実あるいはキノコなどのほとんどは、山村に関係ない都会の人が消費している。そのくせに、生態保護などといって過激な行動をとる都会人が多い。森の中で原始人のように暮らしているのなら未だしも、あまりにも身勝手な人たちである。古い町並みを残しているある町の友人は、「観光客は、古い家は良いなあ、などと好き勝手なことをいって見物にくるが、住んでいる俺の身になって見る。オレだって、窓の大きい明るい家に住みてえよ」といっていた。

動物園でも猿山の前は子供たちでいつもいっぱいだし、テレビや銀座の街角で猿が芸を披露するのをみれば、思わず見入ってしまう。しかし、猿に芸を仕込むのは至難の業で、ものすごく厳しい育て方をするらしい。動物愛護協会の人が見たら卒倒するに違いないという。しかし、これについてはどこからも文句は出ないらしい。人間は身勝手なものである。猿の方がよほど秩序正しい集団生活をしているから、もしかすると私たちよりずっと智慧があって、人間の方が猿よりも毛が3本足りないのかもしれない。事実、人間は歳と共に頭の禿げた人が多くなるが、禿げた猿はあまり見かけない。